

# 手宮公園（小樽市）桜再生プロジェクト

樹木医 中村 哲世（(有)庭園デザイン）

## I. はじめに

手宮公園桜再生プロジェクトは、手宮公園で夜桜ライトアップを実施した手宮地区の商店会が「民の力で小樽の桜を再生させたい」の思いから始まった。

「テングス病の蔓延」。「木々が老木になっている」。「ウソが、ソメイヨシノの花芽を好んで食べる」。「花芽がつく頃の天候の影響」。「近いが、過去に起きた強烈な台風による影響」。近年、小樽市内のソメイヨシノは様々な要因から、花芽が激減するという異変に見舞われている。

手宮公園での民による桜管理は、地元商店街・能島通り商栄会と地元・末広中学校の全生徒（200人）がタッグを組んで、特に末広中学校では授業の一環として2009（平成21）年から本格的に桜再生プロジェクトを立ち上げ、桜（手宮公園の桜は殆どがソメイヨシノサクラである）の管理を進めている。



写真-1 花が咲かなくなった手宮公園の桜（ソメイヨシノ）

## II. 小樽市建設部

民とは別に、小樽市では2009（平成21）年度、「公園内病害樹木処置業務」（640万円：国の緊急雇用創出事業の活用）を発注。

「テングス病」にかかった、手宮公園、なえぼ公園、平磯公園、小樽公園などに植えられている計700本のソメイヨシノの枝を切り、保護剤を塗るなど対応を行っている。

小樽市緑化公園グループは、「テングス病の処置を行ったから花が咲くとも何とも言えない。小樽の桜は老木が多い。市内の公園では、老木を切ったあとの株が残って無残な姿になっているので、今後100年を見据えて桜の再生について考えていかなければいけない」としている。



写真-2 手宮公園の桜剪定作業（平成21年度）

## III. 技術指導

1. 手宮公園の桜の現状、桜の病気について学ぶ集会の実施。また、講師養成に着手。

写真-3 手宮公園の桜について学ぶ集会（平成22年）



2. 手宮公園内の桜を管理する為、およそ 600 本ある桜のうち 110 本を対象として個々にナンバープレートを付け、そのマップを作成。 また、同時進行で病気の部分の枝切り作業の指導も行った。 110本の桜1本ずつに名前を募集して、花見の時期までに名札を付け、1本1本丁寧に観察することにした。



写真-4-1 桜の名札付け



写真-4-2 土壌改良の実施

3. 実践教授（平成 21 年度）
- ・ 11 月 : 手宮公園内の桜位置図（独自マップ）作成準備、作成。
  - ・ 01 月 : 小樽市発注の桜の剪定作業（手宮公園内）の見学。
4. 実践教授（平成 22 年度）
- ・ 4 月 30 日 : 手宮公園の桜について学ぶ集会の開催（末広中学）
  - ・ 5 月 06 日 : 手宮公園の桜（110 本対象）の名札付け。
  - ・ 7 月 05 日、08 日、14 日 : 学年別に桜の土壌改良実施。カルテの作成。
  - ・ 10 月 07 日、14 日、18 日 : 学年別に桜の土壌改良実施。カルテの記入。
  - ・ 3 月 : 今後の打ち合わせ会（予定）。
5. その他
- ・ 指導者用「手宮公園桜管理マニュアル」等の作成。（適宜変化し、完成するまで継続する。）
  - ・ 位置図、カルテ等の作成指導。
  - ・ 公園管理台帳について作成の指導。

#### IV. 小樽市民意識

小樽には歴史的建造物が数多く残り、保存再生の運動や機運が高くなっているが、豊かな自然への思いはいまひとつその陰に隠れてしまっているように思われる。改めて小樽を静観してみると、小樽は 70% 近くを森で覆われた森のまちであることがわかる。海と森とが関連しあった生態系は非常に貴重といえよう。また、小樽の森の多くはエゾイタヤ・シナノキ群落が多く、銭函の海岸にはカシワの樹林があり、石狩市厚田区まで約 25 km にわたって続いている。これはカシワの海岸林としては日本最大級のものではないかと思われる。

このように豊かな自然があるにもかかわらず、小樽市民は地方の利点にあまり気がついていないように思われる。自然のデリケートさや美しさに対して人間がどう関わっていくべきかという知識や知恵を、まだ遅くはないと思われるので活用していける術を意識して高めていただきたいと願う。

## V. 今後の課題

事業資金について2009（平成21）年度、2010（平成22）年度は、小樽ファンからの寄付金による「ふるさとまちづくり協働事業」に採択され、市から助成金を受けることができた。また、2010（平成22）年度小樽市立末広中学校が市内のボランティア校に指定されたことから、全校生徒200名が授業の一環でプロジェクトに参加し、作業を手伝うことが可能となった。このプロジェクトの実行部隊はもともと地元の商店会であったが、次第にボランティアできる人が少なくなり、人員の確保がネックとなっていた。そこで、隣接する末広中学校の子供たちや教員の方々の協力を得て、勉強会の開催や、桜の分布状況を知る現況把握を行うことができた。

手宮公園桜再生プロジェクト事務局の代表は、「今後も生徒たちと協働で桜再生プロジェクトを実施していく」と継続の意思を示している。

指導に臨んでわずかな期間が経過したばかりであるが、これから先の成功を望み、良い方向へ進んでいく為には、主に以下の事項を課題として展開していかなければならないと考える。

1. 再生に向けて手応えを感じるにはまだ長い時間がかかりそうだが、時間とともに小樽市民に良く理解を得ていく必要がある。そのうち市民の参加が必要になろう。そして、最終的には世界の中の「ふるさと」でありえるような手宮公園の桜を目指し、プロジェクトを進めていく。
2. 中学生を対象に、手宮公園の桜に愛着がわくようにと園内の桜110本にそれぞれ固有の名前を付けて、一人が1本～2本を自分の木（ともだち）として健康管理するような仕組みを考えたが、卒業生が後輩へ、また次の世代へと代々バトンタッチしていけるような将来を見越した管理システムを充実させていかなければならない。
3. 管理の進行状況を把握する為に、最終的には管理台帳等の作成が必要となる。

The collage consists of several newspaper clippings from 'Shiribeshi' (小樽後志) dated July 16, 2010. The main headline is 'サクラ「元気になって」' (Cherry Blossoms 'became healthy'). The text describes a soil improvement project at the end of the cherry blossom regeneration project, where students from the city of Otaru participated. It mentions that the project was delayed from July 5th to 14th due to rain. Photos show students in blue uniforms working in the park. There are also smaller articles and advertisements for 'Otaru Journal' and 'Otaru Journal'.

図-1 末広中学校 学校新聞